

蛙
(童話)

暗い晩で風が吹いてゐました。より江はふと机から頭をもちあげて硝子戸へ顔をくつ、けてみました。暗くて、ざはく、木がゆれてゐるさきりて、何だか淋しい晩でした。ときどき西の空で白いやうな稲光りがしてゐます。こんなに暗い晩は、きつとお月様が御病氣なのだらうと、より江は兄さんのゐる店の間へ

行つてみました。兄さんは帳場の机で宿題の繪を描いてゐました。

「まだ、おツかさん戻らないの？」

「あ、まだだよ。」

「自轉車に乗つていつたんでせう？」

「あ、自轉車に乗つて行つたよ。提灯つけて行つたよ。」

より江たちのお母さんは村でたった一人の産婆さんでした。より江はつまらなさに、店先へ出て、店に並べてある箆や鍋や、馬穴なぞを、ひいふうみいよとおと敷へてみました。戸外では、いつか雨が降り出してゐて、濕つた軒燈に霧のやうな水しぶきがしてゐました。兄さんは土間へ降りて硝子戸を閉め、カナキンのカアテンを引きました。より江はさつきから土間の隅にある



桶のところを見てゐました。

「健ちゃん！ 蛙があるよ。」

「蛙？ どちら、どこにある？」

「ほら、その桶のそばにつくばつてゐるよ。」

「あ、青蛙だね。何で這入つて來たのかね

え——こら！ 青蛙、なにしに來た？」

よし江は怖いので、兄さんの後にく、ついてゐました。青蛙はきよとんとした眼玉をして、ひくく胸をふくらませてゐます。ぼんぼん、ぼん店の時計が八時を打ちました。より江は時計をみあげて、お母さんはどこまで行つたのかしらと怒つてしまひました。より江は淋しいので、兄さんが大事にしてゐるハモウニカを借して貰つて、一人で出鱈目に吹いて遊びました。小學校六年生の健ちやんはときく机から顔をあげて、

「よりちやん、ハモウニカに唾を溜めちや厭だよ。」

といひました。より江はハモウニカを灯に透かしてみました。澤山窓があるので、小

いより江は、すぐ汽車の事を考へ出して、ハモウニカを算盤の上へ置いて「汽車ごっこ」とひとり遊びました。より江が板の間の方までハモウニカの汽車を走らせてゐると、戸外で、

「今晚 今晚 今晚！」

といふ聲がします。

兄さんの健ちやんはびつくりした顔をして「誰かね。」と大きい聲で返事をしました。すると、表の硝子戸を開けて、見たこともない一人の男のひとが這入つて來て、

「腹が痛いのだが薬を賣つてくれないかね。」

といひました。

健ちやんは、煤けた天井から薬袋を降して見知らぬ男のひとのところへ持つてゆきまし

た。男のひとは大變疲れてゐると見えて、土間へ這入つて來ると、すぐ板の間へ腰をかけた。「あゝ」と深いためいきをしました。

「誰もゐないのかい？」

とその男は健ちやんに訊きました。

健ちやんは泣きさうな顔をして、

「うん」と云ひました。雨が強くなつたのでせう硝子戸がびりびりふるへてゐます。その男のひとは健ちやんから水を一杯もらつて錢を置いて歸りました。歸りしなに乗合ひ自動車はもうないだらうかとききました。

「九時まであります。」

と健ちやんが應へると、その男



Qu.

のひとは硝子戸を丁寧ていねいに閉めて雨の中へ出て行きました。より江は、ざアと云ふ雨の音をきくと、いまのをちさんは濡れて可愛さうだとおもひ、

「傘を借してあげればい、に……」

と兄さんにいひました。兄さんは壁にあつた傘を取つて、硝子戸をあけ「おうい」といまの男のひとを呼びました。男のひとは二三十歩行つておりましたが、健ちゃんけんちゃんが雨の中を走つて傘を持つて来てくれると、びつくりするほど健ちゃんの肩を叩いて男のひとはよろこびました。——より江たちのお母さんは九時頃歸つて来ました。

健ちゃんたちが、さつきの男のひとの話をすると、お母さんは心配さうに「ほう」とい

つておりました。濡れた自轉車を土間へ入れて健ちゃんけんちゃんが硝子戸に鍵をかけようとすると、さつきの蛙がまだつくばつてゐます。

「よりちゃん、まだ蛙がゐるよ。」

と、健ちゃんが蛙をつまみあげると、薄青うすあおい色をした蛙は、くの字になつた兩脚を強く曲げて逃げようとしました。健ちゃんは空箱あそびばの小さいのへ蛙を入れて、寢床へはいつたより江の枕元へ持つて行つてやりました。

より江はその箱を耳につけて、いつとき、ごそく〜といふ蛙のけはいを愉しんでゐました。

お母さんは、まだ何かお仕事のやうでしたが、より江は箱を持つたまま、小さい躰からだをたてて眠り始めました。

翌る朝。

夜來の雨が霽れて、い、お天気あてでした。健ちゃんは學校へ行きました。より江は

蛙がゐなくなつたと騒いでゐました。戸外では、まぶしい程ほど朝陽あさひがあたつて、青葉あおばは燃えるやうに光つてゐました。より江が庭でほうせん花ほうせんかの赤い花をとつて遊んでゐると、店の士し間で自轉車を洗つてゐたお母さんが、



「よりちゃんや！ よりちゃん一寸おいて。」
と呼びました。

より江は何かしらとおもつて走つてゆきま
すと、昨夜のをじさんが、バナ、の籠をさげ
て板の間へ腰をかけてゐました。お母さんは
にこ〜笑つて、

「わたしは、まア、心のうちで泥棒ぢやなか
つたかしらなんて考へてゐましたんですよ。」
といつてゐました。

をぢさんは、新らしく来たこの縣の林野局
のお役人で、山から降りしなに徑に迷つてし
まつて、雨で冷へこんで、腹を悪くしたとい
つてゐました。

「ほんとに、薬を飲んだときはやれ〜とお
もひましたよ。これはお土産ですよ。」



さういつて、紐でく、つた傘とバナ、の籠
を土間に置いて、より江の頭をなげてくれま
した。より江はをぢさんが、如何にもうれし
さうに聲をたて、笑ふ皓い歯をみてゐました
お母さんは自轉車を洗ひ終ると、店先の陽
向に干して、をぢさんに茶を入れて出しまし
た。

「おや、雨蛙がゐるよ。」

をぢさんがひよいと股をひろげると、をぢ
さんの長靴の後に昨夜の雨蛙が呆んやりした
眼をしてきよんとしてゐます。より江は雨
蛙をどこか水のあるところへ放してやらうと
おもひました。そつと両手で挟むて、往來
の窪みへ置いてやりましたが、蛙は疲れてゐ
るのか、道ばたに呆んやりつくばつたまゝで

ゐますので、より江はひしやくに水を汲んで
ばさりと、蛙の背中に水をかけてやりました
蛙はびつくりして、長く脚を伸ばして二三度
飛びはねてゆきましたが、より江がまばたき
してゐる間に、どこかへ隠れてしまつたのか
煙のやうに藪垣の方へ消へて行つてしまひま
した。

乗合自動車在地響をたて、上がつて來まし
た。をぢさんは、

「さアて、山へ行くかな……」

さう云つて立ちあがりすると、より江のお
母さんは、赤い旗を持つて土間へ降りてゆき
ました。より江もひしやくを持つたまゝ、お母
さんの後へついて、表の陽向へ出て行きまし
た。(むはり)